令和 6 年 3 月 21 日

行 政 視 察 報 告 書

委員会名（会派名）	公明党、新風つばめ	報告者	（公　明　党）近藤隆行議員 （新風つばめ）佐野大輔議員
視察日程	令和 6 年 2 月 28 日～3 月 1 日		
調 査 事 項 及び 視　察　地	①岩手県盛岡市「BeBA TERRACE」　都市公園の経営について		
	②岩手県紫波町オガールプロジェクトにおける公民連携について		
	③一般社団法人世界遺産平泉・一関 DMO より観光政策と収益性について		
	④名取市サイクルスポーツセンター（見学のみ）		
	⑤東日本大震災の震災遺構・伝承施設（防災の観点から）		
参加議員（委員）	（公　明　党）渡邉　雄三、近藤　隆行 （新風つばめ）中山　眞二、田澤　信行、藤井　秀人、田中　淑子、佐野　大輔		

①

【調査目的・内容】

燕市では、燕三条駅近くの土地について Park-PFI の取り組みを試みているが、未だ手を上げる業者がない現状であり、今回は民間側からの参考事例として 3 件に携わっている盛岡市の株式会社 PUBLIQ に伺った。

【所感】

今回視察に行った、「BeBA TERRACE」の場所は、盛岡市が 1978 年に総合公園の開発がスタートしたが、社会情勢や市の財政状況によって長らく計画が進まなかったが、Park-PF1 の活用と、プロジェクトを「BeBA TERRACE」を運営している株式会社 PUBLIQ が担当することで前進した。

ちなみに「BeBA TERRACE」とは、「あそびを学び、まなびを遊ぶ」というコンセプトで、地元団体が育ててきたどんぐりの森を継承し、その森を公園全体に広げていくイメージのもと、自然に馴染む木造建築で岩手山の山なみと調和するよう切妻屋根の連なりを意識した設計になっている。

そのため、大きな芝生広場を囲むように木造建築が佇んでおり、どんぐりの森の保育園、新鮮野菜や季節の花が並ぶファーマーズマーケット、岩手の伝統工芸・南部鉄器の体験工房、ゆったり過ごせるカフェレストランのほか、ドッグサロンやヘアサロン、洋菓子店にコーヒースタンド、手紡ぎ手織りの羊毛織物 ホームスパンの教室と日々の暮らしを楽しく豊かにする店舗や施設であふれ、芝生広場ではマルシェや星空観望会も開催されている。

この計画が前進した要因は、株式会社 PUBLIQ の代表である長澤さんが、行政と民間の間に入り、事業を構築していくという「代理人方式」というプロジェクトの進め方であり、全国でもあまりない手法で取り組まれており非常に新鮮であった。

そして、燕市で多くみられる、民間との連携は、指定管理等の業務委託方式が多く、指定管理後も市が資金を施設等に投入する。しかし、今回の「BeBA TERRACE」は、テナントに入る民間企業からなる運営協議会で、公園整備、維持等の都市公園経営を行い、市からの財政援助は受けてない。

それどころか地域が活性化し、周辺の固定資産税が増加し、市の財政に寄与している。

Park-PFI は、行政と民間がお互い利益を享受することが大事なので、丸投げのような提案ではなく、株式会社 PUBLIQ のような「代理人」がいることで、より公園の価値の向上と、地域の活性化がなされると感じた。

この盛岡市のように未活用のまま放置するのではなく、新たな民間活用の手法によるプロジェクトの推進が必要であるし、また行政がいつまでも資金を投入するような経営スタイルでは、市の財政の負担が膨らむ一方のため、「BeBA TERRACE」のように、むしろ市の財源となるような都市公園経営の必要性を感じた。

②

【調査目的・内容】

公民連携は、近年では、燕市でも宮町商店街について様々な取り組みがなされているが、オガールは公民連携によるまちづくりの参考事例として伺った。合わせて燕市では、サッカー場建設の検討も始まるなか、専用競技場の利点やデメリットも考える必要があると感じ、調査を行った。

【所感】

紫波町は、人口3万3千人の町で、2012年6月官民複合施設「オガールプラザ」がオープン。

オガールとはフランス語で「駅」を意味する「Gare」と方言で成長を意味する「おがる」を掛け合わせた造語。

公共施設としての図書館、地域交流センター、子育て応援センターと、民間施設としての産直マルシェ、クリニック、飲食店などからなる官民複合施設「オガールプラザ」をはじめ、紫波町役場、民間複合施設、フットボールセンター、バレーボール専用施設、分譲住宅地等が隣接。同エリアには年間 80 万人（2021 年）の来街者がある。

今では、地方創生の先進事例のオガールだが、1998 年に紫波町が駅前開発事業用地として 28 億 5000 万円を投じてこの土地を購入したものの、税収が減って計画が頓挫。2000 年には降雪時の雪捨て場として使われ、「日本一高いゴミ捨て場」と揶揄されていた。

そこを、当時の市長と地元の建設会社の経営者である岡崎氏が旗振り役となり実現したプロジェクトである。

この場所の活用方法の一例として面白いのが、行政の管理する土地に、民間業者が建物を建て、その一部を行政が買い取り、図書館や地域交流センター、子育て支援センターを運営しているという手法である。

結果的には、土地の使用料が行政に毎年入ってきており、収益化もしている。

また、民間主導の建設ということで、全体の建設費用を抑え、かつ、入札によらないために速やかに建築工事が行える利点もある。

このことで、行政が買い取る部分の費用も安く抑えられるという点もこの手法の重要な点である。

今回、サッカー場建設の参考のためにお聞きした人工芝1面の岩手県フットボールセンターも、行政の雨水貯蓄浸透施設の上に設置され、事業費 1.75 億円のうち、行政は設置に向けた補助金として 6,000 万円を支出した上で土地の使用許可を出し、施設自体は岩手県サッカー協会が JFA の助成金 7,500 万円を活用して設置し、所有、運営を行っている。そのため、行政には土地賃料が毎年サッカー協会から支払われるなど、ただただ支出するだけで終わらない仕組みづくりを行っている。

また、人工芝は、世界最高水準のロングパイル人工芝を採用した、日本サッカー協会公認のグラウンドとなっており、12/21～3/20 の冬期間、積雪・凍結がある場合には施設 CLOSE としているが、年間 4.8 万人が利用するなど使用率も非常に高い施設となっており、そこからの使用料収入もサッカー協会は確保できる仕組みとなっている。

これ以外の施設も使用用途に応じて適切な民間業者と手を組みながら、公民連携の様々な手法を検討し、活用することで、行政のコストを抑え、さらには収入を確保する仕組みづくりを行っており、この点については、燕市内でも今後の公共施設保有量適正化に向けて、またスポーツ施設の建設、さらには現在指定管理としている施設の有効利用についても検討できる余地があると感じた。

また、有効活用が進み人の動きが出ることで、結果的にはその地域の価値を高め、それが地価を上げる取り組みになるとともに、移住効果、賃金の地産地消などなど様々なところへの好循環を生み出す仕組みとなっていることに改めて燕市でも公民連携を推し進めていくべきと感じた。

③

【調査目的・内容】

燕市では、観光面において DMO 化ができていない状況であり、一方で来年度予算では旅行業の取得を予定している。さらに、燕市観光協会は観光において積極的に取り組む中で今後、補助金だけによらずに収益化の検討が必要なことから、収益化している DMO に伺い調査研究を行った。

【所感】

「世界遺産平泉・一関 DMO」は、観光庁が推進する日本版 DMO として設立。

2019年度から一関市ふるさと納税受託事業者となり、2019年度は3800万、2020年度2億8千万、2021年度7億4千万、2022年度15億5千万と伸ばし、現在は補助金なしで運営、民間 DMO として自走している。

プロモーションに頼った新規客数の維持又は拡大は限界を迎えると考えて「消費単価を上げる」「リピーターを増やす」ことを目標とした、滞在型観光の推進、リピートしたい観光地域づくりを行っている。

さらに、ふるさと納税では、面白い仕組みを活用しており、「全国初・一関市から全国の子ども食堂を支援！」という取り組みを行っている。

ポイントは、全国のこども食堂を支援しつつ最終的には規格外野菜が商品として出荷され、地元農家さんの収益になっていることである。もちろん全国の子ども食堂のためではあるものの、結果的に地域にお金を落とし、社会貢献活動として行うことで地域の PR にも繋がっており、非常に考えられた事業であると感じた。

また、観光面については、DMO 発足の経緯から地元の観光協会との連携、今後の展開などもマーケティングという観点からもお聞かせいただき、課題についても共有いただき非常に参考になった。

人口が減っていく中で、観光での売り上げを上げていくには、消費単価を上げること、また、リピーターを増やすことの2点を考えた時に、平泉・一関と燕市との大きな共通点としては、宿泊場所が少なく、結果的に観光の経由地、立ち寄り地となっていて一番収入面で大きな「宿泊・滞在」という部分を確保できないという課題が共通していた。

その上で、平泉・一関 DMO さんとしては、宿泊しないと味わえない、朝・夜の特別なコンテンツ作りやゴールデンウィーク等のそもそも誘客が多い時期でのイベント開催から時期を閑散期に変更してのイベント開催による誘客効果を狙うなどの取り組みを進めていこうと考えておられており、例えば、燕市でも観光客数の多い秋のイベントを夏や冬の閑散期へのイベント開催に変更する検討が必要と感じた。

（ただし、おいらん道中のように桜とセットのイベントの場合は時期をずらすことはできないので、時期に縛られないイベントの日程の変更の検討が必要）

また、閑散期を狙ったイベントの一例として、平泉・一関 DMO さんからは、冬時期に行った雪上楽園という広場でスノースライダーや雪の迷路などを行った取り組みを紹介いただいた。

イベント当初は、市外からの誘客を狙って行った取り組みだったが、実際に行うと地元の方々からの参加が多く、さらには、インバウンドへの訴求効果も今後は検討できるということで、閑散期でも何か新たな取り組みを行うことで結果的には地域に経済波及効果を生み出すことができたという好事例として、燕市でも非常の参考になる取り組みであると感じた。

（イベントそのものではなく、閑散期に地域資源を利用してできることがないか検討する上での参考として）

また、活動方針として、半歩先の需要を鑑み、地域に根ざした食材、文化、自然、景勝地＋地域の人材を活かした恒常的に供給できるコンテンツ開発を進めていっており、その点についても燕市の観光でも同様に磨き上げを行わなくてはいけないと感じた。

④	**【調査目的・内容】** 燕市では、全天候型子ども遊戯施設ができるなど大曲地区は交通公園や子どもの森などができ、河川公園と合わせて一体的にお子さんを持つファミリーの過ごせる場所の拠点となっている。 また大河津分水などもあり、その周辺の活性化の検討が必要であり、今回はその参考事例として見学した。 **【所感】** 震災から9年半の2020年10月にオープンした名取市サイクルスポーツセンターは、1周4キロのサイクリングロード、スケートボード場や3×3バスケコートにフットサル場子、ども向け遊具などを整備、サイクリストや地元の方々に楽しんでいただける施設となっている。 今回は、先方が議会会期中とのことで、施設見学のみ伺わせていただいた。 改めて、実際に施設にいくと自転車のテーマパークとして、1周 4 キロのサイクリングロードが海沿いに整備されているほか、自転車の貸し出しも行っているので、身一つでも利用できる場所になっていた。 おもしろ自転車を乗れるコースも別で用意されており、さらに館内に入るとこの施設を拠点として、自転車で周遊できる名取市内の周辺施設の紹介、さらには、疲れた体を癒す温泉と、宿泊施設も一緒になっており、まさにサイクリストのための場所になっていた。 少しだけ館内の管理の方にお伺いすると市内市外だけでなく、県外、さらには外国からも利用される方もいるということで、特化した施設の需要と合わせてサイクルスポーツの需要の高さを改めて感じた。 一方で、伺った時期が閑散期の真っ只中なため、課題としては通年で使える仕組みづくりやコンテンツの造成が必要という部分も感じた。 また、燕市でも昨年スケートボード場が建設されたが、名取市では、このセンターのスケートボード場を活用し、小学3、4 年生向けにスケートボードで日本代表を目指すトップアスリートの育成を市外から受け入れを行ったり、小学生・中学生が主役のスケートボード競技の大会を行ったりしており、燕市のスケートボード場の活用に参考となる事例であった。
⑤	**【調査目的・内容】** 1 月 1 日には能登半島を震源とした地震が起き、燕市も多くの方や企業が被害に遭われた。 改めて地震の備えの重要性を感じるとともにいつどのタイミングで起きるかわからない、そのためにどのように体制を整えるのか、その参考事例として東日本大震災での被害状況を伝える仙台市、名取市の震災以降や伝承施設に調査を行った。 **【所感】** 名取市や仙台市の震災に関する場所に伺ってきたが、改めて防災対策の重要性やどう普段から具体的なイメージを持って対策に取り組むのかということを肌で感じました。 最初に名取市震災復興伝承館に伺い、そこのスタッフの方に名取市の被害についてお聞きした。 名取市は閖上地区が大きな被害を受け、5700人のうち約750人がお亡くなりになったそうで、その一つの要因が、ハザードマップの浸水範囲から実際の被害にあった場所が外れていたこと、また、過去に大きな地震による津波があった際にその場所が被害に遭わなかったとされた石碑があり、そのことで市民の方も津波警報が来てもここは大丈夫という意識があったということだった。 一方で、閖上保育所では、津波は大丈夫ということに疑問を持ち、当時の所長が就任してから、津波を想定した避難訓練や避難計画の策定し、震災当日も津波の危険性を感じ、園児たちを職員の車に分散して乗せて閖上小学校に速やかに避難し、園児は助かり、また子どもたちが不安にならないように小学校内でも歌を歌ったり絵を描いたりして通常保育をしたとのことだった。

また、当時の名取市職員の方のお話では、震災時の様子について、ご家族と対面する前に市職員の方々が亡くなった方の体を拭いてキレイにするなどの仕事もされていたこと、さらには震災の次の日には、すぐにどこからか来た人が流された荷物の中から金庫などを奪ったり、タンス預金で収納されていた現金などをあさりにくる輩がいたことなど生々しいお話もお聞きした。

さらに、復興に向けてもやはり現場と国とのやり取りの中で、うまくいかなかったことなども詳細にお聞きしたり、今では避難道路が新設され、海岸線から垂直に避難できる道路が何本も用意されており、移動の際にそちらを実際に通ることもできた。

その後、慰霊碑にお参りし、朝市も見学させていただき、最後に仙台市若林区の荒浜小学校に伺った。震災当時に災害ボランティアに伺った際も存在感がすごかったが、今でも震災遺構として、瓦礫を撤去したうえで、その当時の様子をそのまま残しており、今の方がよりその存在感を感じた。

今では小学校内が震災のことについて伝える展示や避難の様子の証言 VTR もあり、さらには子どもたちが防災について学べる施設にもなっていた。

証言 VTR もその当時どれだけ逼迫していたか、寒さとのたたかいや、市民の受け入れ、子どもたちに津波のようをどう見せるかなどさまざまな状況が証言と当時の映像で振り返ることができた。

震災遺構全体を通して、いかに危機感を持って災害に備えることが大事だということを学ばせていただいた。

その上で、結果的に良かったこと、そうでなかったことの整理をしっかりとこういった震災遺構の中でまとめていくことで次世代に繋いでいく、燕市でもたとえば大きな災害でいくと横田切れなどもしっかりと伝えていくことで、川の整備の重要性を理解していく場所になるということも大事であり、そういった事実をしっかりと引き継げるように河川事務所さんと連携していくことも重要と改めて感じた。

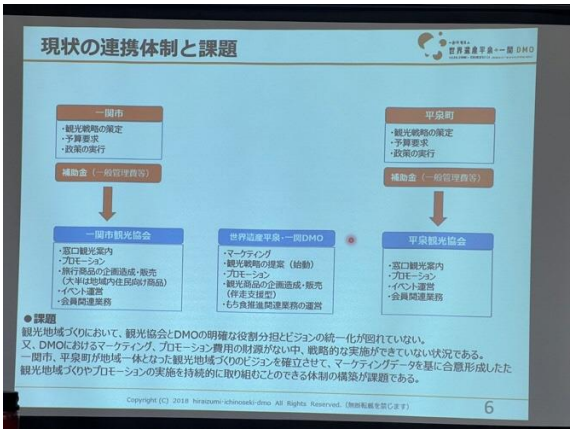
あらためまして、2011 年 3 月 11 日に発生しました東日本大震災で、被害に遭われた皆さまに心よりお見舞い申し上げますお亡くなりになられた方々のご冥福をお祈りするとともに、ご遺族にお悔やみ申し上げます。

【視察の様子】

①岩手県盛岡市「BeBA TERRACE」

②岩手県紫波町オガールプロジェクト

③一般社団法人世界遺産平泉・一関DMO



④名取市サイクルスポーツセンター（見学のみ）

⑤名取市・仙台市震災遺構及び伝承施設

地震発生！そのときどうする？

Q
ハザードマップって知っている？
A
災害による被害を想定した地図のこと
地震や津波などの災害が発生したときに、被害が想定される場所や避難場所などを地図にまとめたものです。国土交通省や市役所などのホームページで見ることができます。
家族でハザードマップを確認し、災害時に避難する場所や避難経路について話し合っておきましょう。

Q
学校にいたら？
そういえば、そろそろ防災訓練ね。参加しなくちゃ。

Q
こんなところに注意！
落ちてくる
動いてくる
倒れる
倒れてくる
東日本大震災のとき、荒浜小学校ではロッカーの中のものが飛び出し、水槽の水がこぼれました。ふだんから物の置き方を工夫したり、固定したりすることが大事です。
A
机の下にもぐる！
大切なのは頭を守ること。机が倒れないように、机のあしを両手でしっかりつかみます。

15:55
15:57
15:58
15:59